
私の幸福をあなたに

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の幸福をあなたに

【Nコード】

N6379Y

【作者名】

usa

【あらすじ】

工藤新一 工藤蘭 共に二十歳

嬉しい知らせと共に、二人の間に事件が起きる。

『だって彼女、ウザいし？キャハッ』

一人の少女が蘭を追いつめていく。

新蘭。結婚している設定です。

Happy 1

ここはとある洋風の屋敷。

一組の若い男女が、何やら話しあっていた。

「そんで、ホームズはな…」

「あーはいはい。そうですか」

瞳をキラキラとさせる青年と反対に、彼女はうんざり顔。

「もつと話しておくべきことあるでしょ」

「ん？あ、ああ…」

彼女が強い口調で言うと、彼の歯切れが悪くなる。

「でも、さすがに早いだろ…」

「だーめ！後回しにしたら、新一絶対はぐらかしちゃうから」

新一は苦り切った表情でコーヒーを飲む。

「そんな不味そうな顔したら捨てるわよ」

「じよ、冗談だつて」

カップを取り上げようとする蘭の手を、新一は慌てて止める。

「お前は、いいから座ってるよ」

「…わかりました」

蘭はそう言って、ソファに腰を下ろす。

「にしても、アイツら遅すぎだろ…」

新一は時計を見つめた。

時刻は約束の時間を一五分過ぎ、一時四五分。

「しょうがないよ。来てっていきなり言った、私達が悪いのよ」

「そうそう」

「やっぱそうなのか…」

ん？

今、一人会話に紛れ込んでいなかったか？

「…黒羽。テメエ…」

「いーだろ、別に。鍵かけてなかったそっちがわりーんだからよ」

黒羽快斗は反省した様子もなく、ソファにひっくり返る。

「やめてよ、快斗！ここ、工藤君ちだよ」

青子は快斗を窘めつつ、自分もちゃっかり腰掛けている。

「不法侵入だぞ、全員」

「んな堅いこというなや、工藤。こっちは来てやったんやぞ」

服部平次は新一と肩を組み、黒い顔とは対照的な白い歯を見せる。

「せやけど、あたしらなんも言わんと、急に入ってしもたし…ごめん、蘭ちゃん」

和葉は申し訳なさそうに蘭に謝る。

「私達はいいのよ。無理言ってきたもらったんだし。今、お茶持ってくるから…」

「あ、オレが行くから、座ってるって！」

立ち上がりかけた蘭を再び座らせ、新一はキッチンへ向かう。

「なんやの、工藤君。今日はえらい優しいやん」

「そ、そう？」

和葉が不思議そうに言うと、蘭は曖昧に返す。

「こりゃ、何かあったな」

「何かって？」

ボソツとつぶやく快斗に青子はたずねたが、快斗は答えない。

「そこで、工藤。何でオレらのこと呼んだんや？」

「ん？ああ…」

新一は全員の前に飲み物を出すと、ひとつ咳払いをした。

「え、えーと、オレ達はもう二十歳で、皆それぞれ結婚した…だろ？それで…まあ、その…」

どんどん歯切れが悪くなっていく新一。

蘭が急かすように小突いた。

もう一度咳払いをし、新一は言った。

「まあ…つまり、オレらにだな…」

再び言葉に詰まる。

すると、業を煮やした和葉が言った。

「苛々さんといって。男なら男らしく、はっきり言ったらどうなん？」

隣で青子が頷く。

「あ、あー…えーと…つまりそういうことだよ。ほら…」

「そんなんでわかるかい！」

「オレらは超能力者じゃねえぞ」

平次と快斗が突っ込みをいれる。

「いや…別に…その…」

「もういいわよ！私が言うから」

蘭がそう言つと、新一はようやく決心がついたようだ。

「ちょっとお前らに報告があつてよ」

蘭の肩を掴んで落ち着かせると、ゆっくりと言った。

「オレと蘭に…」

子供ができた」

本日も、工藤邸は賑やかです。

Happy 1 (後書き)

こんにちは、usaです♪

新連載です！

駄文で時々意味不明ですが、どうぞよろしくお願いします。> ()
|) <

Happy 2

新一からの衝撃の告白から数分。

ようやく客人四人は静かになりかけていた。

「ま、まあ、おかしくはあらへんもんね」
「うん。蘭ちゃん、おめでとう」

和葉と青子は真っ先に祝福の言葉を述べる。

しかし、平次と快斗は新一をからかう方で忙しいらしい。

二人はそろって新一を小突いていた。

「もう！子供なんだから」
「ほつとこ。それより蘭ちゃん、お腹触ってもええ？」
「青子も！」

二人は蘭のお腹に耳をあてた。

「まだ早いよ。一ヶ月だもん」
「でもええなあ蘭ちゃん。もうお母さんになってまうんやね…」

和葉がしんみりと言った。

「お母さんか…うらやましいな」
と、青子も言った。

「二人だってもうすぐだよ、きつと」

「そうかな…」

「うん」

そこで、チャイムの音がした。

「ちょっと出てくるな」

新一が玄関の方へ向かう。

その背中はいくらか誇らしげだった。

「工藤のヤツ、赤ん坊できたら性格変わりのつたな」

平次がぼそりと快斗に耳打ちした。

「そんなもんなのかねえ」

しかし、二人のだらけた会話もそれまでだった。

「ほら、さっさと運んで！」

「早くしなさいよ」

命令口調の声とともに、誰かが中に入ってきた。

「んなこと言っただって、重てえんだよ…」

後ろからはよろよろと大きな荷物を運ぶ、新一の姿。

そして、そのまえには鈴木園子と宮野志保。

一同は啞然としてその光景を見ていた。

「そ、園子…何なのその荷物…」

蘭が口をパクパクさせながらたずねた。

新一は近くにその箱をおくと、ため息をついた。

「何って、お祝いよ！決まってんじゃない」

園子はニヤニヤしながら、箱をあけた。

中にはシャンパンやらワインやらがふんだんに入っていた。

「久しぶりにみんな集まってることだし、パーっと盛り上がりよう！」
「もちろん、おめでたの人はジューズよ」

すっかり親友になっていた志保も、蘭に微笑みかけた。

蘭も笑顔になり、礼を言った。

「ありがとう…」

「そうそう。これ、博士からのプレゼント」

志保は同じ箱から、何やら大きな機械を取り出す。

「な、何それ？」

青子が目を点にさせた。

「自動裁縫機って聞いたわ。これから子供の服とか必要になるだろうからって。この中に布を入れればいいんですって…」

「ほー。そんなら試しに入れてみよか」

平次が面白半分に、自分のハンカチを入れた。

「やめた方が良かったと思うぜ…」
と、新一は言った。

「何でや？」

だが、答えを聞くまでもなかった。

その機械から、作動音とは別の音が聞こえてきた。

そのうち音は大きくなっていき…

「おわっ!？」

「きゃあっ!」

「…な?言つたろ?」

爆発し、見るも無残な姿となる阿笠の発明品と平次のハンカチ。

その場にいた全員が呆然とする。

「と、とにかく、今日は蘭のおめでた祝いだし、皆で飲もう!」

園子が慌てて取り繕い、グラスを配りはじめる。

志保がそれに、シャンパンを注いでいった。

ただし、蘭はジュース。

和葉と青子も遠慮した。

「それじゃ、蘭と新一君の子供の、誕生を祝して…」

乾杯、という前に、再びチャイムが鳴った。

園子は上がっていた手を下げた。

「今度は誰やる？」

「またお祝いに来た人かな？」

和葉と青子がほのぼのと言った。

思えば、このチャイムが、すべての悪夢の始まりだった。

Happy 3

新一は三度目のチャイムも怪しむことなく玄関をあけた。

「はい？」

「あ、あの…こんにちは」

新一はキョトンとした。

目の前には、高校生ぐらいの少女と、弟らしき小学一年生ぐらいの男の子がいる。

「今日向かいに越してきた、沢田っていいです。えっと、今は両親は出かけてていないんですけど…私は、娘の明輝^{あき}で、これは弟の明^あ矢^{きや}です」

明輝はぎこちなく愛想笑いを作る。

「あ、ああ、どうも…」

「これ、つまらないものなんですけど、どうぞ」

明輝は何やら小さな紙袋を差し出した。

「私と母が作ったケーキです。良かったら、食べて下さい」
「ありがとうございます」

戸惑いながらも、新一はそれを受け取った。

「お兄ちゃん、どっかで見たことあるー！」

突如、明矢が新一を指差した。

「コラ！明矢！」

「いや、大丈夫ですよ」

ものすごい剣幕で明矢を怒鳴った明輝を、新一は慌てて止めた。

「すみません…」

明輝は謝ると、明矢を捕まえて無理矢理頭を下げさせた。

「痛いよお」

「人を指差しちゃいけないの！年上の人には敬語を使うの！」

「…はい」

明矢は納得のいかなそうな顔で言った。

「どうしたの？」

蘭が出てきて、キョトンとして姉弟を見つめた。

「ああ…向かいに越してきたんだってよ」

新一は説明すると、二人を紹介した。

「へえ。姉弟？」

「そうです」

明輝はうなずいた。

「なんか…コナン君思い出さない？」

蘭が笑って新一に言うと、新一は少しガクつとする。

「コナンならここにいるぜ…」

「ぜーんぜん、可愛くない奴ならね！」

「あの、突然すみませんでした！もう帰りますから」

明輝は落ち着きのない明矢の腕を掴んだ。

明矢は姉の腕から逃れようともがいている。

「仲いいんですね」

蘭が微笑むと、明輝は苦笑した。

「年が離れてるんで…」

「おいくつなんですか？」

「七歳です」

「いえ、明輝さんは…」

すると、明輝は柔らかく微笑んだ。

「明輝でいいです。私はこれでも二十歳。大学二年生。よく高校生ぐらいに間違われるんだけど…」

蘭は驚いたような顔をする。

「じゃあ同い年だ！」

「本当！？わあ、良かった！近くに同じ年の人がいて」

目を皿のようにして笑う明輝。

蘭も笑い返した。

「良かったら、上がっていかない？ちょうど友達と集まってるの。
皆二十歳の大学生」

「いいの？あ、でも…」

明輝は明矢の方を見た。

「この子もいるから、やっぱり遠慮するね」

明矢は目をまん丸にさせた。

「お姉ちゃん、なんでそんな悲しそうなの？」

「なんでもないよ。お姉ちゃん、超元気！」

明輝は明矢を撫でて、笑顔をつくった。

「らーん、主役がないんじゃないわよ！」

「ごめん、園子。今行く！」

窓から顔を出した園子に向かって、蘭は叫んだ。

「今日はちょっとパーティーやってるの。人数は多い方が盛り上がるし、皆いい人だから」

中からは明るい声が時折聞こえてくる。

明輝は窓と明矢を交互に見つめた。

しかし、やはり少しでも同年代の蘭達といたいのか、笑って頷いた。

Happy 3 (後書き)

パソコンが直ったので更新♪

次回もよろしくです> (´ー´)<

Happy 4

しばらくの間、明輝は他の女子たちと盛り上がっていた。

「へえ。帝丹大学だったの？じゃあ一緒だったんだ」

「本当？私、看護学科にいるの」

「私は法学部だよ」

偶然にも大学まで同じだったと気づき、蘭と手を取り合って喜ぶ。

「看護ってことは、ナース志望？」

園子がたずねると、明輝は恥ずかしそうに言った。

「一応ね。私長女だし、明矢もまだちっちゃいから、これから先両親の面倒見なくちゃいけないでしょ？だから、絶対に何が何でもくならない職業に就きたいと思ってさ」

「しっかりもんやね。あたしとは大違いや」

和葉が情けなそうに言う。

「でも私の場合、動機が単純すぎるもん。…ところで、今日ってなんのお祝い？」

「あ…それはね…」

青子が言いかけそうになった所を、園子と志保が止めた。

「えっ？何々？」

明輝は不思議そうに二人を見た。

「何でもないわ。気にしないでちょうだい」

志保はクールに言い返すと、青子に囁いた。

「彼女は、まだ工藤君が蘭と結婚してるって知らないのよ？」

「あ…そっか」

「もう少し黙っていきましょう」

青子はこくつと頷いた。

「ねえ、ここにいる男の子達って、皆の彼氏？」

そんな会話にも気付かず、明輝は無邪気に聞いた。

新一達は、明矢のヒーローごっこに付き合わされている。

蘭と和葉と青子は、一斉に頬を赤らめた。

「ま、まあ…そんなもんかな」

「近いかもしれへんね」

「うん…」

まさか夫婦だともいえず、曖昧に答える。

「あの三人、どっかで見たことあるなあ…」

明輝は呟くと、考えこんだ。

「もしかして、芸能人？」

「ちゃうよ！あんな色黒男、売れへんもん」

和葉が笑い飛ばすと、青子も快斗を見た。

「あんなバカイトが、芸能人になれるわけないし」

すると、園子も頷いた。

「あの推理オタクも同じね」

「大馬鹿推理之介よ」

蘭が訂正すると、明輝は笑った。

「面白い人たち。好きなのに、言ってることが無茶苦茶だもん」
「そうかなあ？」

青子は首をかしげた。

「顔に書いてある。大好き、って」

その言葉に、再び三人は真っ赤になる。

「か、からかわんというて」

和葉がツンとしていった。

「そ、そういう明輝ちゃんは、彼氏とかいないの？」
「え？私？」

明輝は自分を指差した。

「ん〜。あんま考えたことないや。今まで家のことで色々忙しかったし」

「でも好きな人とかはいるんじゃないの？」

園子がニヤニヤとして聞いた。

明輝の顔色が、一瞬だけ変わった。

「う〜ん。憧れの人だったら、いるよ」

「へー。どんな人なん？」

和葉が興味心身にたずねる。

「んつとねえ、キラキラしててえ、クールに見えるんだけど、ちょっぴり子供っぽいところが可愛くってえ、見た目とは違う、あつつーい人！」

少し照れたように、明輝は言った。

「それ、憧れじゃなくて、マジなんじゃないの〜？」

「やだ、違うよ」

「どうかしらん」

赤くなる明輝を、園子は小突いた。

どこから見ても、普通の恋をする普通の子。

だが、志保だけが彼女を鋭い瞳で見つめていた。

まるで、彼女の化けの皮を見抜こうかとするように……。

Happy 5

次の日の大学でのこと。

蘭は、休学届を出していた。

初めての出産に向けて、これから家で大人しく準備を進める予定だ。

しかし、心細くはない。

子供が産まれるまで、和葉と平次は定期的にこちらを訪れる予定であり、ここ一週間は泊まることになっている。

園子や志保はもちろん、青子や快斗もしょっちゅう遊びに来ている。

そしていつでも、新一がいる。

問題なのは、彼の仕事の方だが…。

「出産予定日は、大体五月の初め、つてところね…」

大学の近くにあるカフェで、志保は呟いた。

現在医学部に在籍している彼女は、蘭の身体の様子をよく見てくれていた。

「新一君と同じ誕生日になっちゃったりして」

園子がそう言って笑った。

「それならもう忘れないよね」

蘭も笑い返す。

右手をそっとお腹にやる。

ここにもう一つ命があるのだ。

まだ動きもしないほど小さいが、こうしていると、心がホッと温かくなる。

そんな蘭を、園子と志保が、優しい眼差しで見つめていた。

「あっ、いた！蘭ちゃん！」

後ろから突然、笑顔の少女が登場。

「明輝ちゃん」

「えへへ、探しちゃった」

明輝はそう言って、空いていた席に腰かけた。

「どうかしたの？」

園子が急いでいた様子の明輝を見て、不思議そうに言った。

「ううん。私、まだこの辺の地理に詳しくないから…いっしょに帰れないかな、なんて」

「いいよ。あ、でも私スーパー寄ってかなきゃ…」

蘭は困ったように言ったが、逆に明輝は目を輝かせた。

「その方が私もいい！今日も両親遅いから、夕飯作んなきゃいけないんだ」

「じゃあ、もう少し経ったら帰ろっか」

蘭はふと時計を見た。

「あともう少しで来る予定なんだけど…」

「え？誰が？」

すると、今まで黙っていた志保が冷たく言った。

「あなたには関係のない人よ」

「ちよつと志保。もう少し柔らかい言葉で言いなさいよ」

園子が窘めたが、志保はすましてコーヒーを啜っている。

「き、気にしないで。もうすぐ来るっていうのは、新一のこと」

蘭が慌てて言うと、明輝は声をひそめてたずねた。

「ね…その新一君って、あの工藤新一君のこと？」

「そ、そうだけど…」

何故かいつもと違うような明輝に、蘭は動揺しつつも答える。

ところが、明輝の方はパツと笑顔になった。

「わぁ！私ファンなんだ！ご近所だなんて、夢みたい！」

気のせいだったのかと、蘭も笑う。

「本当？」

「うんうん、本当！」

明輝は大きく頷くと、三人を見た。

「ねえ、皆はさ、運命って、信じてる？」

「え？」

「私は信じてるよ…。運命の相手…とか」

そう言った明輝の笑みが、どこか怪しかったことに、やはり志保だけ気付いた。

Happy 6

今日の食卓は、何故だか人が多い。

えーと、ひい、ふう、みい…

「つて、おい！」

「なんだよ、うるせえな」

大声を出した新一に向かって、快斗は顔をしかめてみせた。

「どうしたの、工藤君？」

青子もキョトンとしてみている。

「何でお前らまでいんだよ…」

「何でつて…志保ちゃんに呼ばれたからさ」

快斗に言われ、新一は志保の方を見た。

ところが、志保は気にも留めない様子。

「いいじゃない。大勢のほう楽しいよ」

蘭と和葉がキッチンから料理を運んでくる。

「おっ、美味そうやな」

平次が覗き込んだ。

すると腹が鳴り、平次は笑って誤魔化した。

「蘭ちゃん料理上手ね」

明輝が明矢と共に椅子に腰かけて、料理を眺めていた。

「明矢、美味しそうだね」
「うん！」

明矢が大きく頷くのを見て、蘭は恥ずかしそうに笑った。

「そんなことないよ。全部和葉ちゃんに手伝ってもらったし」
「あたしはほとんど何もしてへんもん。蘭ちゃんが一人でやったんとおんなじや」

和葉がそう言うのと、平次が頬づえをついた。

「そらそうや。和葉がこないな料理、作れるわけないわ」
「なんやて!？」

喧嘩腰の二人をなだめようと、園子が言った。

「はいはい、仲が良いのはわかったから、ご飯にしよう」

園子の手には、二本の瓶がある。

「また飲むの、園子……」
と、蘭が呆れ声を出す。

「パーティーはもう終わったよ」

青子が窘めるように言ったが、園子は笑って言った。

「おめでたいことがあった時は、三日ぐらいは飲み続けなきゃね！」
「オヤジじゃねえんだから、程々にしとけよ」

新一も言うてはみたが、すでに園子は全員分のグラスを出している。

「蘭と明矢君は、ジューズね」

「え？蘭ちゃん、お酒ダメなの？」

明輝が意外そうに聞いた。

「今はちよつと控えてるの」

「実際はすごいわよ」。多分、一升瓶は丸ごと飲めるわね」

「園子！」

一滴も飲んでいないのに、蘭は顔を赤くさせた。

「いいからいいから。さ、食べようよ！」

計十人は、それぞれ座りはじめた。

これだけの人数分の椅子があるとは、逆に驚きである。

志保がグラスを配り、園子がシャンパンを注ぎはじめた。

明矢は落ち着きなく料理を見ている。

「おいおい、そんながつつくなよ」

快斗が明矢を見ていった。

「おなか減ったー」

「空腹なんか忘れさせてやるよ。ほら、よく見てろよ……」

快斗が明矢にマジックを見せている間に、全員に飲み物が渡った。

「すごい。本当にパーティーみたい」

明輝が蘭に囁いた。

「それじゃ、今日のお祝いは、明輝ちゃんと、明矢君の歓迎と……」

園子がグラスを持ち上げた。

「蘭の子供の、健康を願って!!」

一人グラスを高く掲げる。

「……あれ？どしたの？」

他の誰も反応しないことに、園子は戸惑った。

「……ねえ」

明輝が口を開いた。

「今の、どういう意味？」

「…あ」

しまったという声を漏らす園子。

それとともに、明輝のグラスが、静かに床に落ちた。

Happy 7

「た、大変！」

「動かんといて」

青子と和葉が、床に散らばったガラスを拾い集める。

「あ、あのね、明輝ちゃん。言いそびれてたんだけど…」

蘭が俯く明輝に向かって言った。

「私と新一は…」

「やだなあ、もう！最初に言ってくれば良かったのに」

明輝は顔をあげると、笑顔を見せた。

「おめでとう、蘭ちゃん！」

「あ、う、うん。ありがと…」

いきなり手を握られ、蘭は戸惑いつつも笑い返した。

「思ったより物分かりがいいみたいね」

志保が園子に囁いた。

「良かったじゃん。言ってみてさ」

「…どうかしらね」

その間も、明輝は早口に話していた。

「うわあ、いいなあ、すごい！ねえ、お腹触ってもいい？」
「い、いいけど…」

やけにハイテンションな彼女に、蘭も困惑した表情。

「ここに、赤ちゃんがいるってことでしょ…？」

蘭のお腹に耳を押し当て、小さな声で言った。

「何だか不思議…。心があつたかくなってくるね」

目をつぶり、まるでそこにいる子供と会話をしているかのように、
明輝は穏やかな顔になる。

「明輝ちゃん…？」

全く動かなくなった明輝を心配し、青子が声をかけた。

すると明輝は目を開け、蘭からも離れた。

「ホントに、おめでとう！」

「何がおめでとうなの？」

明矢がキョトンとしてたずねた。

和葉が屈んで、明矢の目線に合わせた。

「あんな、蘭ちゃんのお腹には、赤ちゃんがおるんやで」

「赤ちゃん？」

明矢が蘭を見つめ、首をかしげた。

「そうよ。産まれたら、一緒に遊んであげてね」

「うん、いいよ！」

和やかな雰囲気の子供たちを見ながら、平次は新一に耳打ちした。

「ええんか、工藤？」

「何がだよ」

「このままにしておいたら、お前んとこの学校、えらい騒ぎになる
んとちゃうか？」

新一はため息をついた。

「かもしんねえけど…ばれちまったもんは、しょうがねえだろ」

「そうそう。念のため、明輝ちゃんには口止めしとくけどさ」

快斗がそう言っつて、新一に向かってニツと笑う。

その時、どこから携帯の音が聞こえてきた。

「あ…ごめん、私の」

明輝は慌てて携帯を手を取った。

「もしもし、ママ？え？もう家？……………うん、わかった。今帰るか
ら」

電話を切ると、明輝は明矢の手をとった。

「ごめん。もう帰んなきゃ」

「また遊びに来てね」

蘭が手をふると、明輝もふり返した。

「今度は、蘭ちゃんの彼氏にも会わせてねー！」

「…えっ？」

蘭は振っていた手を止めた。

「今の、どういうことなん？」

和葉が目点をさせた。

「完璧に誤解しているようね、彼女…」

志保が横目で園子を見た。

「あなたのせいで」

「…ごめん」

そんな会話にも気付かぬまま、明輝と明矢は出ていった。

Happy 8

その後、工藤邸では緊急会議が行われていた。

「で、どうするのよ？彼女、子供の父親が工藤くんだって、理解してないわよ？」

志保が頬杖をついた。

「どうするもこうするも、説明するしかねえだろ」と、快斗が言うが、すかさず和葉が反論した。

「でも、明輝ちゃんがもしも大学に言ったら、ヤバいやろ？もしかしたら、二人とも退学になってまうかも…」

「そこまではせんでも、まあ、呼び出しくらって、停学…ぐらいはありえるかもしれへんな」

平次は腕を組んだ。

「いつそのこと、蘭ちゃんはシングルマザーだ、って通しちゃえば？」

青子が言った。

「別れた彼氏との子供なんだ、とか言って」

「それでその元彼の所に行こう！とか言い出したらどうすんのよ？あの子のことだし、何言いだすかわかんないわよ」

園子が手を振って否定した。

「じゃあどうしろっちゅうねん!？」

「それを今考えてんでしょ！」

「お、落ち着いてよ、二人とも…」

睨みあう平次と園子に、蘭が割ってはいる。

「明日、明輝ちゃんには私から話すから。変に誤解されてたらやだし」

「そうだね…。蘭ちゃんがそう言うなら、青子は賛成！」

青子はニコツと笑った。

「それで良いんじゃないか？」

「せやな。ねえちゃんの思った通りにやるのがええやろ」

快斗と平次も頷いた。

「もちろん、私達も反対しないわよ！」

と、園子が和葉と志保の肩を抱きながら言った。

「んで？肝心の父親の方はどうなのよ？」

園子の一言で、今まで全く口を開かなかった新一に、視線が注がれる。

「あ…まあ、オレは良いと思うぜ」

新一は慌てて答えた。

少し様子がいつもと違ったが、誰も何も言わなかった。

「それじゃ、決定！ま、明輝ちゃんには気の毒だけど、ちゃんとして事実を認めてもらわなくっちゃね」

「気の毒って…何でなん？」

和葉がキョトンとしてたずねた。

「この間、彼女が言ってたのよ。工藤新一のファンなんだ、ってね」
「へえ」

平次は黙りこくっている新一の肩を叩いた。

「おい。どないした、工藤？」

「ボーっとして…何考えてんだよ」

声をかけた平次と快斗に、新一は体をびくりと震わせた。

「な、なんでもねえよ」

「…なんか、怪しいな」

「オレらに隠し事しとるんとちゃうか？」

二人の疑いの籠った目に、新一はたじろぐ。

しかし、すぐに目を逸らしてもう一度、何でもない、と言った。

「お前、嘘つくの下手なやつだなあ」

「はあ！？」

「そないな顔したら、すぐに姉ちゃんにもばれるで？」

新一は蘭を見た。

今は楽しげに笑っている。

だが、新一はなぜか表情を曇らせる。

「なんか…嫌な予感がすんだよ。これから何かが起きるような…」
「不吉なこと言っなあ、お前…」

快斗は呆れた目をしたが、新一は至って真面目な顔をしている。

「ただの予感で終われば、良いんだけどな…」

その重たい一言に、平次も快斗も何も言えなくなった。

Happy 9

帝丹大学前の、小さなカフェの中。

自動ドアが開く音がする。

蘭は振り返った。

これでもう五回目。

しかし、待っている人物はなかなか来ない。

思わず時計を見やる。

一時四五分。

確か、約束の時間は三十分だったはず。

まさか、忘れているとか…。

考えを働かせることに夢中になっていた蘭は、突然うしろから肩を叩かれ、体全体をびくりとさせた。

「あ、明輝ちゃん」

「ご、ごめん、遅くなって…。なんか考えてた？すごくびっくりしてるけど…」

明輝は目を丸くさせて、蘭を見た。

「う、ううん。何でもない。こっちこそごめんね。急に呼び出した
りして」

「大丈夫！私は結構、嬉しかったからさ」

明輝はニコツと笑って、向かいの席に腰かけた。

「あゝ。のど渴いたっ。授業は退屈だし、抜けるに抜けられないし
でさ。なんか頼もうよ。すいませーん！」

蘭の返事を待つことなく、明輝は手をあげて、店員を呼んだ。

「私、アップルティー！蘭ちゃんは？」

「えっと…じゃあ、コーヒー」

すると、明輝はなぜかダメ！と叫んだ。

「いい、蘭ちゃん。今はカフェイン摂っちゃダメだよ？大事な体
なんだし、気をつけなきゃ！あ、この人には、オレンジジュースを」

てきばきと注文を済ませる明輝を、蘭はポカンとして見つめた。

「何？」

「あつ。ごめん、つい…。なんか明輝ちゃん、お母さんみたいだね」

明輝は吹き出した。

「あははっ。よく言われる！ほら、明矢が産まれる前とか、うちの
ことやってたのって、ほとんど私だったからさ。自然となれちゃっ
たっていうか…」

「でも頼りになるもん。ありがとつ、明輝ちゃん」

蘭の言葉に、明輝は微笑んだ。

「これぐらいどうってことないよ！だって私、もうすぐ看護師になるんだよ？蘭ちゃんたちの健康管理は任せて！」

「じゃあ、志保と組んだら最強ね」

「そう？あ、志保ちゃんて、医学部なんでしょ？格好良いよね」

穏やかな世間話をする中、蘭は迷っていた。

どう話を切り出そう。

いきなり言うのも、気が引ける…。

「それです…。…蘭ちゃん？」

「へっ？あ、な、なんだっけ？」

慌てて笑顔を作って聞くが、明輝は真面目な顔になった。

「そう言えば、話があったんだよね？私ってば一人でベラベラと…」

「いいの。あの、それでね…」

蘭が話したそうとすると、明輝はそれを制した。

「大丈夫よ。私、誰にも話してないから。明矢にも口止めしてあるし」

「そ、そう…」

「まあ、大学側としちゃあ、聞こえが悪いからね。自分の学校の生徒が妊娠してる…なんてさ」

そう言ってから、明輝はハッとして蘭を見た。

「ごっ、ごめん！別に私、悪く言ってるつもりじゃ…」

「わかってるよ。平気」

蘭がそう言つと、明輝はホッとしたように頬を緩めた。

「でも、明輝ちゃん。私が言いたかったのは、新一のことで…」
「それぐらいわかってるよ」

再び話を遮り、明輝は頬杖をついた。

「なんかおかしいと思ってたんだ。二人の雰囲気、他の子たちと違つてたからさ…」

そつ明輝が言つと、蘭は安心した。

なんだ、ちゃんと知ってたのか。

大慌てして損した…。

「つまり、兄妹でしょ？」

「…え？」

「蘭ちゃんと、工藤君。だよね？」

「え、えつと…」

蘭が混乱して口をきけないでいると、明輝は早口にまくしたてた。

「やっぱそうよねえ！一緒に暮らしてるっばいし、名字も同じだし。」

最初は絶対彼女かと思ったけど、なんか違うな、って思ってたのよ！」

ええ、確かに彼女ではありません。

なぜなら妻だから！

一人で納得して頷いている明輝に、その一言が言えない。

「ち、違うの、明輝ちゃん！新一と私は…」

「ん？でも二人は同じ年だから…あーっ！わかった！血がつながってないとか？親の再婚で兄妹になっちゃった、って感じでしょ？当たり？」

ブブブー。

はっずれ。

…とも言えず。

「あ、あの…。まあ…え」と…

「それで父親代わりになってるってところかな。うん。我ながら良い推理だわ。私、探偵になれるかも！ね、そしたら工藤君の助手とかなれる？今度聞いてみて！」

もはやそうだと信じ切っている明輝に、蘭は何も言う気がしなくなつた。

「どうしたの？あつ。具合悪い？そうだよ、妊婦を長く待たせてた私も馬鹿だわ…。家まで送ってくよ。立って」

黙ってしまった蘭を見て、明旗は別の意味に解釈したらしく、まだ一口も飲んでいない飲み物にお金を払ってカフェを出た。

「ごめんね、蘭ちゃん」

「だ、大丈夫。なんともないから…」

「ほんと？良かったあ」

屈託のない笑顔を見せる明輝に、蘭もつられて笑った。

人の話を聞かないことが難だが、決して悪い子ではない。

現に、自分の身体をこんなにも心配してくれている。

新一のことは、また時間を見つけてゆっくりと話そう。

呑気にそう考えていた蘭に、明輝は言った。

「ねえ蘭ちゃん」

「何？」

「突然だけどさ…」

視線がぶつかりあう。

「工藤君、私が貰ってもいい？」

Happy 9 (後書き)

明輝ちゃんの勘違いは続く… (汗)

次回もよろしくです> (――) <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379y/>

私の幸福をあなたに

2011年12月4日15時53分発行